伊勢參宮案内地圖

大阪

名古屋

東海道本線

東京

内宮

外宮

宇治

山田

月讀宮

月夜見宮

たまや

鳥羽町圖

二見附近

内宮附近

外宮附近

両宮年中行事

歳旦	大御饌	一月一日
元始祭	大御饌	一月三日
御祈年祭	大御饌	二月十一日
紀元節	大御饌	二月十一日
神武天皇遥拝式	大御饌	二月十七日
神嘗祭奉幣	大御饌	四月三日
月次祭	大御饌	五月十四日
月次祭	大御饌	六月十四日
月次祭	大御饌	七月十四日
風日祈祭	大御饌	八月四日
興玉神祭	大御饌	六月十五日
御神衣祭	大御饌	五月十四日
月次祭	大御饌	十月十四日
興玉神祭	大御饌	十月十五日
風日祈祭	大御饌	十月十四日
神嘗祭奉幣	大御饌	十月十七日
天長節	大御饌	十月十七日
新嘗祭奉幣	大御饌	十月十七日
月次祭	大御饌	十月十七日
興玉神祭	大御饌	十月十七日
月次祭	大御饌	十月十七日
月次祭	朝大御饌	十月十七日
月次祭	朝大御饌	十二月十七日
月次祭	朝大御饌	十二月十七日
月次祭	朝大御饌	十二月十七日
月次祭	朝大御饌	十二月十七日
月次祭	朝大御饌	十二月十七日
月次祭	朝大御饌	十二月十七日
月次祭	朝大御饌	十二月十七日

参宮電車賃金表

区間	賃金
山田（内宮前）—宇治山田	五銭
山田（内宮前）—伊勢	十銭
山田（内宮前）—二見浦	十五銭
宇治山田—伊勢	五銭
宇治山田—二見浦	十銭
伊勢—二見浦	五銭

参宮電車賃金表

山田—内宮間　往復六銭
山田—二見間　往復十六銭
内宮前—二見間　往復十六銭
山田—宇治山田　往復十六銭
山田—伊勢　往復十銭
宇治山田—伊勢　往復十銭
伊勢—二見浦　往復十銭
全線延長　五十哩

楠部　朝熊岳間　往復六十四銭

山田駅ヨリ里程

外宮下馬所	五丁
外宮月夜見宮	四丁
山田上口驛	十五丁
錦水楼	八丁
宮崎文庫	五丁
常盤館	十二丁
古市町	廿一丁
農業館	十九丁
徴古館	二十七丁
神部山公園	二十七丁
神宮司廳	一里七丁
神宮文庫	廿二丁
皇學館	廿五丁
内宮月讀宮	五十丁
宇治橋	一里六丁
御塩殿	二里三十二丁
二見立石	四里五丁
鳥羽港	三里二丁
鵜方	五里二丁
朝熊岳	三里二丁
朝熊社	五里二丁
大湊	一里廿丁

内宮ヨリ里程

外宮	四十五丁
山田停車場	五十丁余
古市町	二十二丁
農業館	二十五丁
朝熊岳	凡六十丁
二見浦	凡九十丁

東京市本郷区駒込千駄木町一番地　東京市本郷区駒込千駄木町一番地　東京市本郷区駒込千駄木町一番地　東京市本郷区駒込千駄木町一番地　東京市本郷区駒込千駄木町一番地　東京市本郷区駒込千駄木町一番地　東京市本郷区駒込千駄木町一番地　東京市本郷区駒込千駄木町一番地　東京市本郷区駒込千駄木町一番地　東京市本郷区駒込千駄木町一番地　東京市本郷区駒込千駄木町一番地　東京市本郷区駒込千駄木町一番地

者表代　原江修

印刷所　大阪市西区靭本町二丁目　日本図書印刷株式會社

発行所　東京市本郷区駒込千駄木町一番地　日本図書印刷株式會社

統圖登録 No.662

伊勢參宮案内地圖

(停)定價 拾五錢

東京 大阪 日本統制地圖株式會社發行

伊勢參宮案内

總説

伊勢の兩大神宮 伊勢大廟は内宮外宮の兩大宮に分れ内宮は申すも畏こけれど、神路山に在して、天照大神を、外宮は高倉山の麓に鎮座ありて、無受大神宮を齊ぎ祀れるが、御鎮座の次第を承るに内宮は八咫の御鏡を御神體として創め倭の笠縫の邑に在せしを崇神天皇の三十九年丹波國吉佐宮に、同五十一年紀伊奈久佐濱の宮に、同五十四年紀伊有田名方濱宮に、同六十四年伊賀名張市守宮に、同六十六年伊賀穴穂宮に、垂仁天皇の二年伊賀都美惠宮に、同四年近江甲可比雲宮に、同八年近江阪田宮に、同十年美濃伊久良河宮に、同十四年尾張中島宮に、同年伊勢桑名野代宮に、同十七年伊勢鈴鹿奈具波志忍宮に、同十八年伊勢阿佐加藤戸片樋宮に、同二十二年伊勢飯野高宮に、同二十五年伊勢度會濱原和比野等各所に御遷座あり、越えて翌二十六年十月十七日を以て今の聖地に鎮座ありしを雄略天皇の二十一年、天皇神夢によつて御靈感あり即ち大佐々命勅命により、山城、近江、大和、伊賀等に奉遷し、同二十二年九月今の大宮地に鎮め奉りしなりと申す。

參拜の順路と交通機關 内宮は宇治に外宮は山田に鎮座し兩宮の距離五粁半、參宮線山田驛より外宮へ三百米に過ぎざるを以て先づ外宮に參拜して内宮に向ふが順路なり、道程は外宮内宮間徒行して途次の名蹟を探るも可、また電車・バスの便あるを以て外宮前より直ちに電車で楠部停留場右方高地の伊勢離宮地を拝しつゝ内宮に參拜し歸路を朝熊山或は二見方面に向ふも可ならん、其他海路ならば神社港か鳥羽港に上陸するもよし、神社より山田まで六粁、鳥羽ならば鳥羽驛より參宮線によれば二見方面に向ふも可ならん、其他海路ならば神社港か鳥羽港に上陸するもよし、神社より山田まで六粁、鳥羽ならば鳥羽驛より參宮線によれば二見方面に向ふも可ならん、或は二見驛に下車して先づ内宮より向ふべしと雖もそは順路と云ふべからず。

參宮と名蹟見物

【汽車】による參宮ならば何れよりするも關西本線亀山驛にて參宮線に乘換へて(大阪、京都、名古屋より直行列車あり)南に、津、松阪の都市及び其他幾多の小驛を過ぎ宮川驛に至らば驛に近く宮川を隔てゝ其對岸は神都の地たる宇治山田市と相對す。

【電車】によれば大阪上本町より関急電車の直通運轉により名張松阪を經て宇治山田驛に至る、又大垣方面によれば桑名、松阪を過ぎて大神宮前驛に至る関急電車伊勢線の便なり。

【宮川】大和大峯ヶ原に其源を發して伊勢灘に注ぐる河流にして、舊時は勅使大廟に參向の際清拔ひを行はれ、又一般の參宮者は此の流れにて水垢離を取るを例とせし處なり、汽車は此の宮川を渡り山田上口驛を經て參宮順路驛たる山田驛に着すべし。

【月夜見宮】に參詣せんとならば山田驛に下車して驛前より道を右にとれば可なり、同宮は外宮別宮の一にして、月夜見命、荒魂命の二座を祀る、同社に參詣して直路辿めば裏參宮道より驛前に通じたる、參宮電車線に沿ふて進めば、外宮神苑まで約二百米。

【參宮電車線】は神苑前より左折し内宮及び二見方面に至る。外宮參拜後途次の名蹟を探る無く直ちに同方面に向ほんとには神苑前にて電車の便によるが可ならん。また山田驛前より左方に向つて、

【結城宗廣公の墳墓】山田驛の南方吹上町の光明寺舊境内に在り、公は延元三年の秋、南朝の廢類を歎きて其復興を企り義良親王を奉じ、先づ東北地方に割據する處あらんとして北畠親房卿等と宮川の河口大港より乘船し陸奥に向ほんとせしに、海上颶風の爲めに吹戻され、遂に事を遂げずして其十一月此地に殞死したる人、碑は近年有志によりて建立さる、先づ大廟に參拜し歸路其墓碑に詣で英靈を慰むべきか。

【外宮神苑】に入り、明治二十七八年の役後大山大將より寄獻せし征清記念砲を右手に見て敷きなされたる青砂の上を歩めば前方に一橋あり、

【一の鳥居橋】と云ふ、橋の袂に衛士の警衛せる表見張所あり、橋を渡りて一の鳥居に至る遂次右方に昔時平清盛が參向の時冠を其枝にかけしと云ふ。

【清盛捕】ありハ一の鳥居より二の鳥居に至る途次左方の御手洗にて口を漱ぎそれより右方に荒垣を引き繞らしたる建物のあるは行幸啓の御時の、

【行在所】と承はるだに畏しとも畏し、二の鳥居を過ぐれば右方に

【神樂殿】あり、御神樂を奉奏するには此處にて願ひ入るべく神樂殿に並んで、

【大麻授與所】あり、之れ云ふ迄も無く大麻及び本暦を頒ち授さゝ處、更らに夫れに隣りて建てゝは撫社、末社に御饌を供ふる。

【九丈殿】なりと申す、九丈殿の次ぎに清き通路を隔てゝ神々しき外宮の御宮城を拜す、南面せる、

【外宮】の御宮城を拜せば板垣を左右に按へたる三の鳥居あり、一に板垣鳥居とも申し御正面建てられた鳥居を通じて白の几帳を垂れたる、

【外玉垣御門】を拜す、普通人の參拜は此の御門前にて、行ぶべく申すも畏これども御内部の御模樣を承はるに外玉垣御門の次ぎに第四の鳥居、内玉垣御門、瑞垣御門、瑞垣御門を隔てゝ、

【御正殿】の鎮まりまして其御構造は我國最古の御規模に則らせ給ひ、掘立の御柱に萱葺の御屋根を以てし長さ十米、廣さ五米、外面よりその御屋根の千木鰹木のみ遙かに拜するを得べし、因みに御宮殿の聖地は東西二箇所にありて、古來二十一年目に東或は西に御改築を定めさせられ、現今の宮殿は西の聖地にありて去る昭和四年に遷宮せられたり、參拜後御池の畔に出づれば、

【神鶏】の餌を餌ふ漁る樣の長閑にも床しく、池の東邊に沿ふて南に辿れば通路十字を爲して左に風宮、右に土宮、直路に多賀宮鎮座あり、また外宮宮域の東邊より北方に通じたる路に向へば前に述べし、九丈殿の北方には、

【五丈殿】其また北方に内御厩あり、更らに北して御宮城の背後に至れば朝夕の御饌を調へ奉る。

【忌火屋殿】御酒殿、御竈木屋等右方に建てられ、廳て北の宮居を過ぎ裏見帳所前を經て北すれば御域外に出づ、前に述べたる裏參宮道によれば此の處に來るなり。

【裏見張所】前より右に神苑を辿りて前に述べたる征清記念砲の附近に至れば其東北方に、大正天皇、

【御手植の松】あり、陛下御齢十四歳にて、尚未だ皇太子殿下に在せし御頃御參拜遊ばされし御記念の松樹にして、常盤の翠いや榮えに榮えつゝあるも目出たし。

外宮御神域の參拜々觀は以上を以て粗ぼ終えたる譯なれば、之れより電車によりて内宮に向ほんには御神域外に出づべくまた途次の名蹟を探りて徒行せんには一の鳥居橋詰より東に辿るべし。

【勾玉池】は一の鳥居橋の東邊にあり其形狀勾玉に似たるを以て斯く名づく、池邊に櫻藤あり、池中に白蓮ありて、春夏の風光一層佳なり。

【高倉山】は勾玉池の東邊より登るべく阪路一粁餘、山上の眺闊茫だ佳なり、

【豐宮崎文庫】池の東邊、高倉山登山路の東方にあり、慶安元年時の外宮の神官學子弟修學の爲めに建設したる圖書館にして古書珍本を藏すること夥し、同文庫より北に出づれば即ち内宮道にして岡本町、尾上町、倭町、古市町、中の町、機木町、牛谷阪、浦田町、中の切町、今在家等を經て字治橋に達するを舊道とし、別に外宮神苑の前より、東南に繞りて字治橋畔に達する新道を開かれたるあり、之れを一に御幸通と云ふ、尾上町の北方なる岩淵町に、

【光明寺】あり、寺は天正十四年、聖武帝の御創建になり、元應元年南朝の忠臣結城宗廣堂字を再建し、其子月波禪師が中興の名刹なり、更らに内宮道に戻りて尾上町に至れば其東端なる尾上坂上に宗廣公御爪の墓牌を安置したる、

【書雲院】あり、俗にお夏寺と號す、傳へ曰ふ、家康嘗て山田に逗留せし際、此の地のお夏と云ふ美女を認め江戸に召伴れて侍女とせしが家康他界の後お夏歸郷して當時を建立すと、

【お杉お玉】にて古來著名なる間の山は尾上町、倭町の中間なり、尾坂部は本來なれども舊時宇治、山田兩町の境界地なりしより間の山と稱するに至りしなり、其お杉お玉は此の間の山及び生谷阪に今は一種の觀光物として僅かに其形態を存すと雖も行人の目を惹こ及ばず、倭町に至れば、百米餘にして、

【伊勢音頭】を以て古來名を知られし古市町に達す、古市町は遊廓地として繼續前に紺樓百餘を軒を連ねたりしと云ふも、今は昔日の如く盛んならず、又伊勢音頭も院本に其名を傳へられし油屋は旅館に轉業し、只だ備前屋、杉本屋の二軒に於てのみ客の望みに應じて開演することゝなれり。

【發古館】農業館、倉田山にあり、發古館は神宮の寶物を始め上古以來の遺物服裝、器具、古書等を、農業館は農林、水産、牧畜、工藝に關する器具標本を陳列して一般の觀覽に供す、再び古市町に戻り尚も進んで猿田彦神社、神宮祭主官舍、

【神宮司廳】神部署等の前を過ぐれば、麓て水淨き五十鈴川邊に達し、壯重なる、

【字治橋】を見る、橋は長さ五十一間、幅四間、凡て檜造りなり以て、之また式年御造替の一として廿一年目毎に架換さる、橋を渡れば既に、

【内宮神苑】にして巨杉老樹の蒼鬱たる神路山は樂高の氣を漲えて神々しく清淨なる神苑には綠の毬を展べしが如き芝生に稚松の點綴せるもすがすがしく、參路に沿ふて右に曲れば、明治三十七八年の役後大山大將より奉獻の戰利亘碑、明治三十七年の役後東郷大將より奉獻の戰利大亘彈等あり、尚進めば明治二十四年大正天皇の皇太子殿下に在ませし御時御手づから植えさせられし、

【御手植の松】を右方に拜して一の鳥居橋を渡り一の鳥居に至れば左方には行在所、右方には祓所あり、祓所の南邊を右に進れば五十鈴川岸にして參拜者はその流れにて口を漱ぎ手を洗ふべし、元に戻りて參路を尚も進れば、古杉老檜左右に蟠を為して聳え、蒼古幽邃の念自ら胸に迫るを覺えん、二の鳥居を過ぐれば聖路は十字を爲し、右方に向へば風宮橋を渡りて風新宮に左方に向へば勾玉池に達するなり。

【大麻授與所】は其十字路の東角に、神樂殿は其右に隣り、其他五丈殿、由貴御倉等あり、之れより約五十米にして、

【内宮御宮域】に至るべく、其聖地は外宮と同じく東と西の二箇所に定められ、現今の御神殿は西の聖地に建ち、御構造の御規模は之又、外宮と變らず只だお屋根の千木に於て外宮は外に切られしも内宮は内に切られ、鰹木の數は外宮に九本、内宮は十本、御階の數は外宮は十級、内宮は十級なりと承る、神路山の裾は四邊に深く森々たる木立に風靜まりて白木造の宮居は一點の塵も許さず、衆匪の參拜所と定められたる外玉垣御門に額けば實に西行が詠ひたる「何事のおはしますかは知られども畏けなさに涙こぼるゝ」の感を覺えざるものなし。

【如雪園】は大阪の篤志家帶谷傳三郎氏の經營に係る無料休憩所なり、眺望絶佳多數貴顯紳士の來園せるあり、久通宮及び伏見宮のお手植松あり。

【五十鈴川上流勝地】宇治橋の前より川を上ること約五十米にして紅葉の名所法度口あり、それより約一粁の處に、鮑石、海鼠石、西行屋石、竈ヶ淵等大小の奇嶽清流にありて天然の絶勝地たり、其より上流には鏡石、牛石、大瀧小瀧等勝地甚多し、又附近山中には尾張百目紅、千人櫓、基盤石、鷲嶽洞等ありて何れも一日の探勝に値すべし、内宮參拜後朝熊山に向ふとならば、神苑の參路を元へ宇治橋を左に見て尚も北方に進め路路を左右に分岐せるを以て右路を辿れば其登山路にして、左路は二見道なり、尤も「朝熊登山電車」參宮電車楠部停留場にて乘換年坦部十三分に發に至り、夫れよりケーブルカー八分間にて山上に達す、頂上にも自動車の便あり、二見は宇治橋畔より電車の便によるがよく、或は朝熊より下山するも可なり、または内宮より約一粁にして歌聖西行の舊蹟たる、

【西行谷】あり、西行此地に來りて神跡山の櫻は吉野山に勝ればとて寓居すること三年にして東に下ると西行物語に見えたり。

【朝熊山】は海拔五五三米、内宮神苑より山頂まで八粁、登路百米毎に石標を建て、途次の所々に茶店ありて登山者の便にす、頂上に近く名物の朝熊山萬金丹を鬻げり、麓て絶頂に至れば、

【金剛證寺】あり、堂宇は奈良朝の頃曉空和尚の開基にかゝり、一時廢類に傾きしも淳和天皇の天長元年弘法大師、之れを再興して眞言宗の一宇をせしが、延長年間錄倉建長壽第五世の東丘禪師更らに中興の祖となりて臨濟宗を改むと、本尊には天平年間聖武天皇の御寄進にかゝる聖德太子が天竺より傳來せしと云ふ虚空藏菩薩を安置し舊時は輪奐の美を極めしも率來再度の火災にかゝり、今は本堂のみ存せり。

【鎌　池】之また朝熊山の山頂にあり、雖も毎年陰曆六月一日の外は人の近づく能はざる處と云ひ傳ふ、其他明王院矢追地藏等名高く金剛證寺の、

【奥の院】たる谷海庵は最も景勝の地を占め富士見茶あり、朝熊山より、

【下山路】を二見に向ふには登山路を下ること約二粁にして右方に岐れ道を辿るものにして、山路稍險なりと雖も麓の朝熊村まで二粁餘にして至るべく朝熊村より、二見まで道程約四粁。

【二見浦】は山田より五粁餘、宇治より前記の朝熊山よりの道程と同じ、電車は山田及び宇治より遠し、山田を發したる參宮線は又此地に二見浦驛を設けたるを以て電車の二見停留場或は參宮線二見浦驛に下車して二路東に辿れば旅館、土産物店等櫛比せる街衢を過ぎて風光明媚なる海濱に至る、東は海上廿八粁を隔てゝ遙かに三河の伊良湖崎と相對し駿遠信の諸山、さては富嶽の秀峰を晴天の日に粉偕の如く望むべし、此の海濱夏時の海水浴に最もよく其右端に至れば古來人口に膾炙する。

【夫婦岩】あり、岩は大小の二基岸を去ること十八米の海上に立ち、其大なるは高さ約十米、周圍四十三米、小なるは高さ四米、周圍十米、大正七年の海濱の爲め小岩の一部を缺かれたりと雖も復舊して舊觀をとゝむ、此の兩岩に注連縄を張れるは約一粁沖の海上にある興玉明神を拜する爲なり、世俗二見の浦の初日出と稱するは拂曉の朝暾を此の兩岩の間を通じて拜す、其勝亦云ふべからず。

【鳥羽港】は二見浦驛より七粁七分、參宮線進ぜり、地は、志摩國に屬し、舊時は稻垣氏の城下たりし處、伊勢灘口の良港にして海上には谷志、菅、坂手、安乘、桃取、神天等其他大小幾多の諸島を控へ陸には日和山の勝あり、山上より之れ等の諸島を指顧の間に眺め遠く伊良湖半島を望むの狀實に筆紙の佳く盡す所にあらず、春時より夏時に耳りて船を賃し島巡りをするも可、釣を垂れて鮮魚を漁するに都人士の知らぬ面白味あり、又遊船により海女の鮑取り見物も一興なるべし。又鳥羽より賢島に向ふ志摩電氣鐵道あり、終點賢島は眞珠港として名高く、又風光明媚にして氣候温暖避暑避寒の好適地として世に知らる。

參宮みやげと伊勢の名物

外宮内宮の御後大麻なる土産物に數ふるは勿體なけれど、伊勢參りの家土産には無くては適はぬものとして山田には壺屋の煙草入、木箸春慶塗、張皮籠、合羽、傘、青海苔、鮑箱眞、宇治には赤福餅、生姜糖、蒲鉾、神路山の神箸、神盃、玩具、二見にては貝細工榮螺の壺燒など特に名高く、其他名所繪葉書と名所寫眞帳は伊勢に限らず而して之れ等の品々を鬻ぐ家は參宮沿道の各所にあり。

「さやかなる月日のかげにあたりても　あま照神たのむむばかりそ」　定家

年中行事

歳旦大御饌	一月一日午前四時
元始祭	一月三日午前七時
私御饌	一月十一日午前十時
大祓	一月卅一日午後三時
新年祭大御饌	二月四日正午
紀元節大御饌	二月十一日午前七時
新年祭奉幣	二月十七日午後一時
此日勅使參向、儀仗兵出張	
神武天皇遙拜	四月三日午前八時
天長節	四月二十九日午前六時
大祓	四月卅日午後三時
風日祭	五月十四日午前十一時
大祓	五月卅一日午後六時
御卜	六月十五日午後七時
	六月十六日午後十時
	六月十七日午前二時
月次祭朝夕大御饌	六月卅日午後六時
大祓	九月卅日午後五時
神御衣祭	十月十四日午前十一時
御卜	十月十五日午後七時
神嘗祭夕大御饌	十月十六日午後十時
神嘗祭朝大御饌	十月十七日午前二時
神嘗祭奉幣	十月十七日午後五時
此日勅使參向、儀仗兵出張	
大祓	十月卅一日午後四時
明治節	十一月三日午前七時
新嘗祭大御饌	十一月廿三日午前十一時
新嘗祭奉幣	十一月廿三日午後一時
此日勅使參向、儀仗兵出張	
大祓	十一月卅日午後三時
御卜	十二月十五日午後五時
月次祭夕大御饌	十二月十六日午後十時
月次祭朝大御饌	十二月十七日午前二時
月次祭奉幣	十二月十七日午後五時
大正天皇遙拜	十二月廿五日午前六時
大祓	十二月卅一日午後三時

年參り

毎年十二月の末日より翌一月一日にかけて參向する年參りと稱して古來の習慣なり、年參りは一度の參拜にて二年分を兼ねるものなりといへど神を崇め奉る誠意に昔きしものにあらざるべきか。

統圖登錄六六二號（統合版）七、〇〇〇部
出文協承認ア三五〇一一一號

不許複製

昭和十六年九月二十日印刷
昭和十六年九月廿五日發行
昭和十八年八月十一日再版發行

(停)定價 金十五錢
送料 四錢

著作權者 大淵善吉
東京都神田區東福田町一番地
發行權者 日本統制地圖株式會社
代表者 植野錄夫
會員番號 一二三五三一番
東京都神田區東福田町一番地
發行所 日本統制地圖株式會社
振替東京一一、〇〇一番
大阪市西區西長堀北通二丁目十九番地
日本統制地圖株式會社大阪支店
振替大阪七一、一七三番
東京都神田區淡路町二丁目九番地
配給元 日本出版配給株式會社